

# 2009 私のおすすめ3作品

募集締め切り 2010年1月31日、到着順に掲載

## ●杉野 実

### 1◆ 消費者関連専門家会議シンポジウム「安全・安心を消費者視点で考える」(6月2日・明治安田生命ビル)

新聞でみて傍聴することにしたのですが、「消費者関連専門家会議」という団体のことは、このもよおしではじめて知りました。各企業の「消費者関係」担当者から構成される団体、といえ、どのようなことをしているのかおおよそ想像がつくでしょう。基調講演も勿論あって、その内容もなかなか興味ぶかかったけど、このシンポジウムの性格は、パネルディスカッション「暮らしの安全と安心」に登壇したパネリスト諸氏の顔ぶれに、もっともよくあらわれていたと思います。肩書きだけをならべてみましょう。東京大学大学院工学研究科教授、独立行政法人製品技術基盤機構製品安全センター参事官、株式会社イトーヨーカドーQC室総括マネジャー、社団法人消費者関連専門家会議理事長そして主婦連合会事務局長です。技術的な議論でおもしろいことはいくらかあったけれど、やはり一番すごかったのは、「誤使用による事故が続発するのは、技術的なことを知らなさすぎる(バカな!)消費者にも責任がある」などと「企業側」関係者が堂々といいはなっていた(そして、そういわれても主婦連事務局長は顔色ひとつかえず冷静に対応していた)ことです。でも私の感想は(主婦連事務局長の感想もおそらく)、バカといわれて腹をたてた、なんてものでは全然なく、バカといわれておこるようではそれこそ本当にバカであることを証明するようなものであって、そういう「専門家」諸氏をだしぬくけるように、「しろうと」である「消費者」のみなさん、一層気合いをいれて勉強しましょう、というものでした。

### 2◆ 黄金の洋楽ライブ「デビッド・ボウイ」(1月・NHK衛星第2)

私は1980年代に高校生でしたから、「レッツ・ダンス」の大ヒットなんかは知っているんですが、デビッド・ボウイといえ、やはり、音楽性がどうこういう以前に、ちょっと両性具有的(はっきりいうとオカ...)な衣装やメイクで身をかざっていて、映画「戦場のメリークリスマス」では坂本龍一とキスしちゃって...といったイメージをいただいでいました。ところがカラオケのネタをし入れるつもりで、メロディがちょっとよかった曲の歌詞をネットで検索してみたら、いやもう、びっくりしちゃったんですよ。まず大ヒット曲「レッツ・ダンス」ですけど、あれほど熱烈なラブソングだったとは知りませんでした。SF趣味もちょっとはある私のマニア心をタイトルでくすぐった「スペース・オディティ」は、歌詞をさらっと読めば悲惨な宇宙開発事故を歌ったとしか思えないんですが、深読みすれば、「2001年宇宙の旅」のモノリスみたいな、「人知をこえた大いなるもの」との遭遇を歌っているともとれるんですね。そして音楽的には単純明快でソウルフルな「ヤング・アメリカンズ」...ケネディのような指導者が登場したときにはみんな期待したけど、結局なにがどうかわったっていうの?...つまり政治風刺なんです。あれあれ、これごく最近の話じゃないんですよ。いやあ、デビッド・ボウイって、こんなにす

ごい歌詞を書く人だったんですね。これからどんどん、カラオケで歌っちゃいます！... でも「スペース・オディティ」はカラオケにはなかったよなあ。

### 3◆ セオドア・ゼノフォン・バーバー「もの思う鳥たち」(日本教文社)

この本の主題はずばり、動物の知性、とりわけ鳥類の知性です。日本版の題名はかなりひかえめなんですよね。原題はなんと、"The Human Nature of Birds"です、つまり「鳥類の人間性」！... おやおや、日本版でも副題にはちゃんとそう書いてありますね。鳥類は(哺乳類や魚類、さらには昆虫の例もでているが)、単に頭がいいというだけでなく、個体ごとにはっきりした個性をもっている、というのが著者の一貫した主張のようです。「頭がいい」の例としてあげられているのは、鳴き声にもちゃんとコミュニケーション上の意味があること、周囲の環境にあわせて柔軟に巣づくりができること、そして周知のように、非常な長距離をまちがえずに「わたる」ことができる、などといったことです。これらはまあほぼ異議なくうなずくことができるのですが、著者がとりわけ情熱をこめてえがいている「鳥と人間との意思疎通」となると... 鳥にも1羽1羽の個性がある、鳥の方でも人間を自分と同等以上に知性ある存在と認識している、といった主張はいいとして、オウムどは本当に人間のことばを「理解してしゃべっている」との説には、やはり疑問を禁じえません。「訳者あとがき」によると著者は、「素粒子から銀河にいたる」あらゆる存在に「心」があると考えているとのことですが、こうなるともう神秘主義であって、私は絶対に賛成できません。しかし、「人間の知性なるものも、つまるところ本能にもとづく行動様式の一例にすぎない」との著者の説には、おおいに賛同したいと思います。■

## ●桑垣 豊

### 1◆『消された政治家 菅原道真』平田歌二著 文春新書 115 2000年

平安時代も100年がすぎた西暦900年ごろ、税制の根本が変わる。大化改新以来の人頭税から土地税への変更である。口分田システムは、生まれると土地を与えられ、その代わりに人数分の税を収めるという制度である。

税を収めるのは成人男子ということになっていたので出生届は女子ばかりとなり、私有地荘園が増え、死亡後の班田の回収も滞った。平安朝の財政は危機に瀕していた。それを現実にあわせて、だれが土地を持とうとも、その所有者が面積に見合った税を収めるように改めたのである。実行したのは菅原道真であったが、手柄を横取りして道真を太宰府に左遷したのが藤原氏であったというのが、著者の主張である。

ここで私が注目したのは、道真が税制を変えたということもさることながら、政治体制を変える事なく税制を根本的に変えて中世がはじまった、という点である。そして、それが中国の制度をまねたわけではなく、独創的にあみだしたものだということである。その後、経済体制の変化にあわせる形で「幕府」という政治体制が生まれるが、これも独創的である。

しかし、普通の歴史家は、中国から学んだり西洋に対応物がない限り、あまり注目しない。注目しな

いから見えないのに、日本には独創性がないなどという。これは、明治以来の病であると、評者の私は思う。

## 2◆『百姓の江戸時代』田中圭一著 ちくま新書 270 2000年

江戸時代の年貢は重く、農民は虐げられていたことになっている。年貢は五公五民で、半分が取り上げられたという。しかし、農民の人口比が80%であったことからすると、とりあげた米は輸出もしていないのに、誰が食べていたのか。実は、五公五民というのは、農地の想定収穫高に対するもので、例えば1反(10アール)で二石として税は一石である。しかし、実際の収穫は4石ほどであったようで、実質は25%である。

東北などの収穫が少ない地域をのぞくと、平均税率は30%代であったようで、これは世界的に低い。武士は石高が固定していたので、江戸時代の経済成長の恩恵にあまりあずかることができなかった。町民は、間口幅が一定以下だと基本的に無税である。幕府や藩、個別の武士は、商人から借金をして生活し、明治維新のどさくさに踏み倒して終わっている。実質的には、商人から税金をとっていたのと同じになる。しかし、借金をする立場は弱いので、力関係が身分と逆転していた。

江戸時代の評価が変われば、明治維新政府のキャッチフレーズ「日本の夜明け」などというのがそろそろしくなる。もちろん、江戸時代は身分社会で遅れた社会であった。しかし、21世紀初頭の私たちも「あれだけ技術や民主主義の理念がありながら、貧富の差の大きさや戦争ばかりしていること」を遅れていたと言われるに違いない。

既存の歴史家は、幕府の出したお触れなどを中心に歴史を記述するので、武士の建前が事実とされてしまう。著者の田中氏は、土蔵から出て来た農家や商家の帳面などを分析して、裏付けのある歴史を描いている。それは『消された政治家 菅原道真』の著者にも見られる共通の特徴である。

## 3◆『戦国時代の大誤解』鈴木真哉 PHP新書 446 2007年

この本と限らず、日曜歴史家鈴木氏の著書全般を紹介したい。戦国時代のいくさと言えば、大河ドラマのごとく刀をふるってチャンバラをしていたことになっている。プロの歴史家もそのように説明している。

しかし、著者は日本の歴史上、刀が戦場の主役であったためしがないという。弥生時代から戦国時代中期までは弓矢、戦国時代後期からは鉄砲が主力である。刀は手柄の証拠として、敵の首を持ち帰るための首取りの道具であった。あるいは、護身用や最後のとどめの道具。剣の達人、宮本武蔵も島原の乱に鎮圧軍として出陣しながら、敵の投げた石にあたってケガをして、即退場している。

なぜ、まちがった歴史が横行しているのか。太平記や江戸時代にできた軍記物は、おもしろくするために、白兵戦として、いくさを描いている。それを同時代史料と区別する事なく採用するため、多数決の結果、刀が主になってしまう。

西洋ではローマ帝国滅亡後、弓矢がすたれて、ジェノバ兵など一部にしか弓兵がのこらなくなる。剣が中心の例外的な歴史が展開する。私の考えでは、それが原因でイスラムにもモンゴルにも西洋は負けてしまう。それを手本とした日本の歴史学もまちがいをおかす。

長篠の合戦屏風をよく見ると、武田方にも鉄砲が書いてある。実は銃撃戦であった。関が原の戦いになると、両軍あわせて数万丁の大銃撃戦で、恐らく当時世界最大である。いくさが終わると、貴重な弓矢や鉄砲玉、刀、槍はすべて回収するので、ほとんど残らない。それが誤解を増幅する。

白兵戦を想定した武士道は、江戸時代に官僚化した武士の存在価値を裏付けるためのものであった。それが後に帝国陸軍の体質とむすびついて、アメリカ軍に銃剣突撃を試みることになり大損害をこうむる。事実をつみあげて歴史を描かない限り、これからも悲劇を繰り返すことになる。■

## ●横山 雅俊

### 1◆ 天野郁夫（著）「大学の誕生」（上・下） 中公新書

サイエンスアゴラにて NPO 法人サイコムジャパンの企画「ワークショップ “本音で語る『大学とは何か』”」を開催した際の参考図書として、かなり必死に読みました。自分の中の、日本の科学技術行政や教育行政、医療行政などを見るにつけ、基本理念から落とし込んで具体的な政策に結びついていると心底理解出来る事例が極めて少ないのでは...という漠たる心証。そして、昨今のポストク問題や大学院重点化などの高等教育及び科学技術に関わる諸問題を根源から考えてみたいという思い。それらゆえに手に取った数冊のうちの1つです。内容は新聞各紙の読書欄に書評があり、屋上屋を重ねるのを避けるため自粛しますが、『この歴史的経緯を以てすれば、昨今の情勢もある意味で宜なるかな』と思えたものでした。日本の高等教育政策において、基本理念（→しばしば“哲学”と称されますが）と言えるものが如何に無かったか。実は、元からほとんどそうしたものは無かったのです。

### 2◆ 学術研究フォーラム（編）「大学はなぜ必要か」 NTT 出版

同じく、サイエンスアゴラのワークショップ “本音で語る『大学とは何か』” の参考にした本のうちの1つです。大学そのものの存在意義を真っ正面から主張するという感じの本で、4人の著者が5つの章を分担執筆しています。大学そのものの理念や歴史から説き起こし、教育と研究を共に担う存在としての大学という立ち位置を明確にしています。昨今議論の的に登りやすい産学官連携や地域社会との連携、市民との対話などにも配慮しつつ、大学が担うべき知的営為とその社会的意義について議論している数少ない本の一つと言えます。ただ、社会が大学に何を期待し、また大学が社会にどういった知や人材を送り出すべきなのかに関してはまとまった見解があるとは思えませんでした。私がサイエンスアゴラのワークショップで問題にしたかった論点はまさにそこでした。■

## ●山田 耕筈

### 1◆「この時代に生きること、働くこと」

中村佑、島本慈子著、岩波ブックレット No.702、2007年6月発行

著者の島本さんは「ルポ解雇」(岩波新書)や「戦争で死ぬということ」(同)、「ルポ労働と戦争」(同)など現場に足を運んで生の声を伝えるジャーナリストである。その報告は静かながら慈愛にあふれている。2月11日京都で彼女の講演会があり、参加した。そのときの内容がこのブックレットに近い。もう一人の著者中村佑さんは9.11でアメリカのセンタービルで銀行員の二男をなくされた父親である。前半は中村さんのその経験が綴られている。最後に「私達は、私は全くそうですけども非才な凡人ですから、哲さん(ペシャワール会の中村哲医師)のような素晴らしい活動、無料の医療活動などできるわけがありませんけれども、私にもできることがあります。それは人の痛みだとか、苦しみだとか、悲しみだとかを想像すること。それは私にもできるし、たぶんこれはどなたにもできると思うんです。世界からテロあるいは戦争をなくす本当の根っここのところはここらへんにあるんじゃないかと、ニューヨークのグラウンドゼロを見つめながら、私はそのようなことを思っていました。」

島本さんは「戦争のエキスとして殺人の現場そして復讐の心理」を話し、殺人の方法は変わっても一度戦争を始め敵対関係になると全ての住民が敵に見え、自分を攻撃してくるように思われるということは共通であることを話された。それ故、中村さんの言葉は大切に絶対に暴力に訴えてはならないと主張されている。戦時の体制に入るとあらゆる労働現場が戦争一色に染まること、現在の過酷な労働現場はその寸前に近いと警告された。かろうじて憲法によって労働の戦時体制化が防がれているといわれた。

### 2◆「新・反グローバリズム」

金子勝、岩波現代文庫/社会 195、2010年1月発行

慶応大学の金子先生の「反グローバリズム」を大幅に書き換えた新編集版である。金子氏は小泉改革から新自由主義、市場原理主義を厳しく批判されてきた。テレビで拝見すると口を尖らせ鋭く批判されるので一時の感情で話されているように誤解したことがあった。しかし、著書とあわせて考えると熟考の上の結論を抑制を持って話されていることがよくわかる。この著書でも現在の世界経済危機から、特にわが国のとるべき基本的方向について深い考察が提出されている。私のファンレターの返事で「遺言のつもりで発言している」という便りをいただいたことがある。労働者の現場、福祉・医療、地域経済・農林漁業、財政、福祉と全面的な視点から、エネルギー環境革命の推進など最終章では持続できる社会を提案されている。深い考察は大変参考になると思う。広く読まれるべき本であると思う。

### 3◆「たたかう新聞」－「ハンギョレ」の12年

伊藤千尋、岩波ブックレット、No.526、2001年1月発行

以下、橋本真佐男さんから山田に届いた推薦文です。引用させていただきます。

この本の内容は民主主義の徹底や協同・共生システムに関連しています。大資本による新聞しかなか

った韓国で、市民・国民の共同出資で真に国民の為の新聞・進歩的な大衆紙が創刊され多くの読者を獲得していく波乱万丈の過程が描かれています。組織の民主主義、労働の意義、社会主義との関連などについて考えさせられます。協同・共生のシステムが生産・消費の分野だけでなく報道の分野でもあり得ることを知りました。この本が出版されて10年になります。今でもハンギョレは健在のようです。■

## ●富田 やほ子

### 1◆重い本 甘い辛口

『ダーウインの信じた道』

エイドリアン デズモンドさんジェイムズムーアさんによる著作

放送出版協会 2009 6月刊

4センチの厚さの翻訳本ですがよみにくくないです ありそうでなかった本です  
生物みな平等一個の細胞起源から！ 重点的視点 奴隷制  
人の差別の不毛に反対する著作としての 種の起源 の勇気！  
長谷川真理子さんの詳しい解説も引用索引も丁寧なまことに良心的きちんとした本

### 2◆軽い本 甘口

『植物図鑑』 というタイトルの恋愛小説

日本図書館協会の言論弾圧に反対し表現の自由の保障をかかげる 宣言を掲げるわたしが勤務する図書館が舞台らしい？ 図書館戦争というSF小説で2006年大ブレイクベストセラー 続編まんがも読まれ続けるなどした有川浩さんの趣向が変化 植物図鑑という 科学？ お料理本 道草レシピつき

### 3◆重軽両方 エスニックの味わい 民族音楽！

2009年12月15日(財)武蔵野市民文事業団(市民への安価良質サービスすばらしいです)主催  
ウツラ・ピルッティヤルビーさん フローデ・フェルハイムさん出演

幸せお祈りくださり 映像映写もあり 要介護の母や友人先生方と来場のみなさまとともに歌うところもあり まことにあわせなひとときでした

武蔵野スイングホールにて行われた ラップランド サーマ 方々の ヨイク といわれている 即興歌のコンサート民俗音楽にしてワールドミュージック アフリカの方とも CD あり フィンランドヨイクで検索 で インターネットでも映像とともに聞けますぜひどうぞ！

## ●石坂 信之

### 1◆ 科学の落とし穴 (池内 了、晶文社、2009年3月)

著者が10年にわたって書き続けてきた科学時評集の3冊目です。サブタイトルには「ウソでもないがホントでもない」とあり、「ウソでもないがホントでもない」の話題ではダムの水利用など、公共事業の話です。さっそく引用してみます。“公共事業を新規に起こそうとするときの恩恵について、ダムなら各種の水利用量に予想成長率を勘案して、十分な利用があると見せかけるのだ。過去数年の実績に基づいて数値を最もらしく思わせる・・・ダムなら10年以上も時間を要する……そして、それがウソの数値であるとわかったときには、きっぱりと撤退する勇気を持たねばならない。それまでに投下した資本を惜しむあまり、ウソでもないがホントでもない数値を後生大事に守り続けることは、未来により大きなツケを回すことに他ならない。”とあります。八ツ場ダムについては中止をめぐる論議がまだ記憶に新しいですね。

「市民と科学、市民の科学」ではスウェーデンやイギリスのオープン・カフェを紹介しながら、京都で著者も参加しているオープン・カフェを語っています。さらに「市民の科学」の試みとして、原子力資料情報室に続き、この「市民科学研究室」が紹介されています。「市民と科学、市民の科学」では、“既存の科学に捕らわれなければ、まだまだ科学の未来は明るいのである”で締められています。

### 2◆ 文化としての科学／技術 (村上陽一郎、岩波書店、2001年4月)

著者の「岩波講座、科学／技術と人間」の論考を軸に、一冊にした本です。科学や技術の最近の50年は、国家の発展にかかわり、あるいは文化と相互に影響しあったり、市民生活の隅々まで浸透しています。この本は、科学や技術によって現代世界が迫られている問題をとりあげています。

「科学／技術と生活空間」では、晩年の本田宗一郎が寂しそうに漏らした一言が忘れられない、として、本田氏が「自分のところで作っている車、もう俺にはわからないんだ」と言ったことを紹介しています。一言で言えば「技術は見えなくなっている」のです。

今、トヨタのプリウスのブレーキ問題が話題になっています。トヨタの幹部の方が適切な説明をしなかったことも指摘されていますが、たぶん、“科学的にも適切な理解ができていない”あるいは、“一般の方にわかりやすく説明できない”ことが批判を浴びる元があるのではないのでしょうか。

最後の章は、「科学／技術と教育」についての書き下ろしです。この中で私が注目したのは、日本の科学教育の元々のねらいです。それは、科学者という専門家の持つ知識内容を、非専門家である学生、生徒に伝えるという、そういう性格を色濃く備えた教育が理科教育なのだと。少数の専門家を育てるための教育なのだそうです。というわけで、その理科教育が理科嫌いを作ってきたことになる、というのです。

確かに合点がいきます。私も指摘したいのは、専門家の知識内容を学生、生徒に伝えるという学習指導要領が高校から中学校、小学校まで続いていることです。学習指導要領とそれを具現している教科書をよく検討してみると、科学の基本的な素養を身につけることより、科学を体系的に理解するということが目指しているのがわかります。体系的といっても専門家が考えた体系で、教育の立場から見ると唐

突であったり、内容を理解できないものもあります（そういう意味では、専門家が教科書の本気で点検していないと、私は思います）。優れた科学者は必要ですが、そのために科学教育があるのではなく、科学の基本的な素養、リテラシーを身につけた多くの市民こそが必要なのです。市民生活のリテラシーを目的にした科学教育が望まれるのです。それは決して簡便な科学ではなく、ある場合は専門家でさえ即答できない（磁化した釘の磁力はいつなくなるの？）けれど、知識の使い方を学ぶってこういうことなんだ、というワンダーランド（興味が展開する世界）だと思うのです。

### 3◆ 秋山紀行 現代口語訳 （信濃古典読み物叢書 8、鈴木牧之著、信州大学教育学部附属長野中学校編、信濃教育会出版部 2008年7月）

秋山記行とは鈴木牧之が文政 11 年（1828 年）に町内の桶屋と秋山郷（信州、越後にまたがる寒村）に旅した時の記行です。生前には出版されなかったのですが、現在、原文や訳が出版されています。鈴木牧之は塩沢町の人で、江戸を始めとして各地を旅し、北越雪譜の作者として知られています。訪れた秋山郷といえば、昭和 42 年の豪雪の時にも陸の孤島となるなど、ごく最近までも簡単には行けない僻地でした。鈴木達も苦難の末に秋山郷に達するのですが、秋山郷沿いの中津川にそびえ立つ岸壁などの景観に驚き、世間の景勝などは遠く及ばないとしています。鳥甲山という 2,037m 程度の山ながら、今も容易に登はんでできない岩山があります。また、村人が粗末な家に住みボロ着しか身につけていないことを記しています。しかし、鈴木がほんとうに驚いたのは秋山郷の自然でも貧困でもなく、その極貧生活にもかかわらず鈴木達を快く歓待し、明るく楽しそうにしている村人だったのです。栗餅らしきものを食べるのですが、鈴木は、のどを通らないと言っています。ところが、その家の男女は、いかにもうまそうに口に含んで味わっている。老人も 70 歳を越えているのに白髪が見えるだけで若い者と変わらない。一日中山仕事をし、夕餉は皆と同じであぐらをかいている。大きなお椀に、粟、稗に小豆がわずかに入ったものを、男も女もうまそうに食べている楽しそうな様子は、とても里人のおよぶところではない、と記している。

明治 11 年(1878 年)、東京から北海道を旅行したイギリス人の女性、イザベラ・バードは美しい自然の中に潜む貧しき農村を観察し、米沢盆地では、地上の楽園のごとく人々が自由な生活を楽しんでいたと記しています（「日本奥地紀行」）。バードの筆致は時として厳しいから、貧しさの中の楽しさを見たのは、やはり、まぼろしではなかったと思います。鈴木とバードの時代には 50 年の開きがあるけれど、文政と明治であまり差はなかったそうです。貧しくても明るく楽しそうに生活していた地方、あるいは時代があって、その確かな温もりが伝わってくる本でした。■



## ●山口 直樹

### 1◆ 奥村宏『株式会社に社会的責任はあるか』(岩波書店 2006)

最近、よくみかける言葉に CSR(企業の社会的責任)という言葉がある。一種の流行語である。会社は競って CSR 担当のセクションをつくり、その専門家がそこに配置されている。1970 年代に日本では公害反対運動や消費者運動が盛んになり、さらには商社批判がなされていた。1973 年の第一次石油ショックや 1979 年の第二次石油ショックが、起こり不況になって企業がつぶれては元も子もないということになり企業批判は鎮静化していく。80 年代の日本のバブル経済全盛のころには、日本的経営が賛美されていたが、1990 年代バブルが崩壊し、銀行、証券会社、ゼネコン汚職、佐川急便事件などがおこり再び企業批判の機運が高まった。2000 年代には、三菱自動車の欠陥車のリコール隠し、雪印食品の牛肉偽装事件、東京電力の原子力発電の事故隠しなど企業不祥事が発生した。こうしたなかで再び企業の社会的責任がいわれるようになった。しかし、実のところこの「企業の社会的責任」というのは、企業批判を押さえるために現実の企業の実態を隠蔽するためになされているのではないかと奥村氏は疑問を投げかけている。

「社会に貢献して儲かる」これほどいいはなしはないが、はたしてそれは本当なのか。「儲かっている会社は社会によいことをしている会社だ。」ということに通じるが、それは本当なのか。もし、「企業の社会的責任」を果たすことは儲かることだ。」というのであれば、それは設けるために社会的責任を果たしていないということであり、それなら何も「企業の社会的責任」などということをとる必要はないのではないか。「儲けるために努力しています。」といえいいだけのことである。」(2 頁)と。

この本での奥村氏の議論のポイントは三つある。

まずこの場合、企業といわれているのは、株式会社だということである。企業には有限会社など株式会社以外の形態のものも存在する。しかし、現在、企業といわれているものは圧倒的に株式会社である。銀行や保険、鉄道や軽工業などに限られていた株式会社が、重工業の分野に普及するのは、19 世紀末からであり、合併などによって株式会社の規模が巨大化するの、20 世紀になってからで、この時代から人々の生活を株式会社が全面的に支配するようになったという。

第二に株式会社とは実体ではなく機能であるということを奥村氏は主張する。

市民科学に関心をもつものにとって興味深い部分は、著者が、経団連の企業行動憲章をとりあげているところである。そこでは「良き企業市民」として積極的に社会貢献を行う。」と書かれているという。しかし「企業は良き市民」であるのかどうか。

ここでは企業が、個人のようなヒトやモノのようにとらえられているが、実際はそうではない。だから法人である企業は刑事上の責任は問われないということになる。

こうした認識から奥村氏は 21 世紀の企業改革の方向性を「企業規模の縮小」

「株主有限責任制度の再考」に見出し、人間にとって企業とはないかという問題を捉えなおそうとしている。

奥村氏によれば、これまで日本には「株式会社とはなにか」という株式会社に関する哲学的な研究というものほとんどないに等しいらしい。日本社会で大きな影響力を持ち生活の中で大きな比重を占めているのは、株式会社である。私も南満州鉄道株式会社のなかの研究所に関心を持ってはきたが、株

式会社とはなにかとそれほど深くは考えずにきていたと反省させられもした。21 世紀の市民科学者は、株式会社のことに詳しくなる必要があると感じた。新自由主義に親和的でない STS の構築もこうしたところにヒントがあるのではないかと思う。

## 2◆ 竹中憲一『大連歴史散歩』(皓星社 2008)

私は、かなりこの著者に注目してきた。

著者には同じような題名の『北京歴史散歩』という本があるのだが、実によく北京を歩いている。同様に大連も非常によく歩いている。

科学史に関わるところでいえば、満鉄中央試験所や大連衛生研究所やハスの研究で著名だった大賀一郎のことなどもでてくる。

特に印象に残ったのは、“危機管理評論家”として知られる佐々淳行氏の父親が、大連の行政で高い地位についており、戦後引き揚げて日本国内でも行政的に高い位置にいたということが書かれていた部分である。

戦前の植民地の人脈が、戦後日本に流れ込んでいることを感じさせられる瞬間である。佐々淳行氏といえば石原慎太郎の選挙参謀として知られるが、植民地主義的心性の持ち主ということでもこの両者は、共鳴しているのではないか、そんなことを考えさせられた一冊だった。

## 3◆ 中目威博『北京大学元総長蔡元培—憂国の教育家の生涯』(里文出版 1998)

いささか古い本であるが、本書は北京大学百周年の年に書かれた現時点では、蔡元培に関してかかれたほぼ唯一の日本語の本である。論文はいくつかでているのではあるが、一書となっているのは、本書だけであり、貴重である。私は、2006 年の北京大学科学和社会研究中心のゼミで孫小礼教授が蔡元培について報告したとき「日本でもこういう本が出ているのだ」と紹介した記憶がある。

蔡元培は、清朝末期に生まれた知識人である。幼少期から科挙に合格するための教育を受けており伝統的な中国知識人の教養を身につけていたが、日清戦争の敗北で清朝については疑問をいだくようになる。西洋文明の強さを自然科学の発達に求め、伝統的な知識人とは違い自然科学を学んでいたことは興味深い。

また、われわれにとって興味深いのはその自然科学を日本語の本を通じて蔡元培が学ぼうとしていたことであろう。蔡元培は、西洋の本の多くが日本語に訳されていることに注目し、日本語の本を読むことで西洋の科学の知識を吸収しようとした。(ただし、彼は日本語を話したり聞いたりはできなかった。)

その後ドイツに留学し、専門の美学や宗教哲学を学ぶが、その過程でドイツのベルリン大学の創設者のフンボルトの学問理念に共鳴した。

北京大学の前身、京師大学堂が、成立するのは、1898 年のことだったが、研究大学というよりは、地主や官僚の子弟が学ぶ資格学校という性格が強かった。1916 年に留学からかえって北京大学の総長に就任した蔡元培は、大学改革を実行に移す。北京大学の改造に関して蔡元培が、最も力を入れたのは、教授陣の刷新であった。

蔡元培は、文学部を重視したが、文学部長には当時、新文化運動の旗手であった陳独秀を選んだ。この人選は、世間を驚かせた。このほかにもアメリカのコーネル大学とコロンビア大学でプラグマティズム

を学んだ胡適、マルクス主義の影響が強かった李大釗、音韻学の錢玄同、作家の周作人や魯迅(現在、北京大学で使われている校章は、蔡元培が魯迅に依頼してデザインしてもらったものである。)などが招かれた。

理学部においては、日英留学の地質学者の李四光、また英留学の丁文江、アメリカ留学の古生物学者グレーボーなどが集められた。理学部長には、アルバート・アインシュタインの相対性理論をはじめて中国に紹介した物理学者の夏元王栗が選ばれた。(あまり知られていないことだが、1921年3月、蔡元培と夏元王栗は、ドイツのベルリンを訪問し、アインシュタインに北京大学で講演してくれるように頼んでいる。これは残念ながら手違いで実現しなかったが、蔡元培の自然科学への関心の強さを示している。)

法学部でも人口学者の馬寅初のような学識の高い学者は、留任させた。

こうした改革により、北京大学は、研究型の大学に変わり、学生も地主や官僚の子弟から一般家庭の知識青年にかわった。蔡元培が学長をやっているときはちょうど五四運動の時期にあっており、北京大学には、急進的な青年が集まることになった。

中国には、「北京大学生が動けば中国が動く」という言葉があるが、蔡元培の大学改革がなければ、こうした言葉は生まれなかった可能性がある。

蔡元培の学問思想の特徴は、「学術自由」「兼容並包」「文理沟通」という言葉であらわされ学術の自立、古今東西の思想を包括し、自由に研究させること、文系と理系の学問の橋渡しをする、文学部と理学部を基礎に大学を運営するといったものであった。

こうして現在の北京大学の基礎が、築かれていくことになるのだが、多くの現在の北京大学のスタッフたちが、蔡元培を「北京大学の父」と呼び尊敬しているのは、こうした理由によるところが大きい。1998年と2008年の北京大学100周年と110周年のときに蔡元培についてのシンポジウムが開催され、中国の学者たちは、繰り返し蔡元培にたちもどって討論している。また北京大学のなかには2007年から元培学院という学科も立ち上がった。現代中国でも新自由主義のもと知識資本主義が、進行し、北京大学の性格も変化を余儀なくされている。そうしたなか大学となにかを原点にたちもどって考えさせる良書であるように私には思われる。■

## ●角田 季美枝

### 1◆ 倉谷うらら（著）『フジツボ：魅惑の足まねき』

岩波書店（岩波科学ライブラリー）、2009年

2009年は仕事で煮詰まっていて、本をあまり読むことができませんでした。思考がかたまると、気がついたら、ナマコやクラゲやウミウシやシダや「癒し系」(?) 生き物本を時々眺めてました。その中で一番お気に入りがこの本。

フジツボは甲殻類といった生物的知識から、都市伝説まで多種多様な蘊蓄がいっぱい。図版もいっぱい。パラパラマンガのような造本も good! いやー・・・こんな本、一生に一度でいいから編集してみたいなあ!

### 2◆サイモン・シン（著）、青木薫（訳）『フェルマーの最終定理』新潮文庫、2006年

大学で知り合った、読書&まちづくり&観光同好会トポフィリアの仲間から、「数学がわからない私ではまった!」とすすめられた本。確かにおもしろかった。ピタゴラスまでさかのぼる西欧の数学史(女性の数学者、日本人の数学者も含まれているところもおもしろく読んだ)、最終定理を「証明」するワイルズの人生や証明のプロセスやその背景の数学界の政治的空間の様相など、複層的な読書空間に魅惑される。読者の気持ちの盛り上がるツボを非常におさえたドキュメンタリー。翻訳もこなれていて非常に読みやすい。

### 3◆ 幸田文（著）『崩れ』講談社文庫、1994年

青木奈緒（著）『動くとき、動くもの』講談社文庫、2005年

養老猛司・岸由二『環境を知るとはどういうことか：流域思考のすすめ』

PHPサイエンス・ワールド新書、2009年

気候変動関連の政策は緩和策と適応策双方が必要だが、日本では緩和策のほうに関心や議論が集中している。局地的な集中豪雨など降雨パターンが変わりつつあるようなので、是非適応策への関心や議論を増やしていきたい。そのときに、一番必要な情報は足もとの大地の構造がどうなっているかという情報ではないか。2009年に読んだこの3冊をセットで読むと、それが痛感される。

1904年生まれの子孫は70過ぎて、たまたま安倍川の支流大谷川の崩れ(静岡県)を見て大きく心を動かされ、場合によっては現地の関係者におぶられて、富士大沢崩れ、常願寺川葛山崩れ(富山県)など各地の崩壊地を歩いた。その見聞が『崩れ』。孫の青木が25年後に再訪した見聞が『動くとき、動くもの』である。幸田の『崩れ』は、関係者と著者の個性のぶつかりあいというところもあり、独特の味わいがある。孫の青木のエッセイのトーンは、子どもに野原で遊ばなくなった若い世代にも響きやすいかもしれない。つくづく日本の「砂防」は都市生活者には見えないなあと感じる。

気候変動関連の適応政策転換は足もとの地球を見直すのが必須で、そのために「流域」という枠組みが絶対必要という主張が全編を貫く『環境を知るとはどういうことか』は、神奈川県三浦半島の小網代

の谷のウォーキングから始まる。この小さな流域を保全する経緯を読めば、もっと大きな規模の流域の保全が並大抵ではできないことがよくわかる。また、気候変動適応策を含む統合的生態系管理政策への転換も「泥んこになって遊ぶ子ども」が始まりという最後の指摘は、マクロ／マイクロ、社会／個人の織り成す政策空間のダイナミクスを見事に象徴している。■

## ●泉 とも花

### 1◆おすすめ web サイト

[『i - morley』](http://i-morley.com/)

<http://i-morley.com/blog/>

モーリー・ロバートソンさんと池田有希子さんが無料配信するネット放送。

チベット、東トルキスタン（ウイグル自治区）などの日本にはなかなか入ってこない地域の情報（[チベットやウイグルに行って現地から発信した動画](http://www.tibetronica.com/)も無料でみれます <http://www.tibetronica.com/>）、原発や大麻に関する様々な意見のやりとりも興味深く、個人発メディアの可能性をひしひしと感じます。

### 2◆おすすめ TV 番組

[『松嶋×町山 未公開映画を観るTV』](http://www.sonymusic.co.jp/etv/matsumachi/index.html)

<http://www.sonymusic.co.jp/etv/matsumachi/index.html>

テレビを見る習慣がなくなって 15 年ほど経ちますから、こちらの番組も最初はインターネットで知ったのですが、最近では YouTube にアップされてもすぐに消えてしまうので TV 番組ということで紹介します。毎週日曜日 23 時～24 時 日本未公開のドキュメンタリー映画を前編・後編と分けて東京MXテレビと TVK で放送中。（こちらのチャンネルが見られない方、ネット上でたくさんの感想が読めますので、番組タイトルで検索してみてください。例えば[こちら](#)

[http://japan.cnet.com/blog/poweryoga/2009/04/17/entry\\_27021837/](http://japan.cnet.com/blog/poweryoga/2009/04/17/entry_27021837/)

こちらにも日本にはなかなか感じるできない他国（主にアメリカ）の一面に触れることができる貴重なチャンネルです。巨大スーパーウォルマートの話に始まり、南北戦争を題材にした話、水問題、カードローン社会、巨大メディアの偏った情報コントロールなどなど毎回衝撃のドキュメンタリー映画を放送してくれます。現在 23 本め。

各回のあらすじは[公式サイトはこちら](http://www.sonymusic.co.jp/etv/matsumachi/backnumber/index.html)に

<http://www.sonymusic.co.jp/etv/matsumachi/backnumber/index.html>

最後は本の紹介

### 3◆『[葬](http://sou4444.web.fc2.com/sou.html)』 おもだか大学 編・著

<http://sou4444.web.fc2.com/sou.html>

お葬式のざっしです。

『冠婚葬祭』の場面のなかで、特定の宗教・習俗に属していない自分の場合、主役の立場になってしまったときに一番困るのが『葬』だなど。

『葬』で主役のときには既に自分では動けなくなっているから、意に沿わないことが行われていてもいちいち口を挟めない。

無縁社会というタイトルの番組もNHKで放送される昨今、生前に死後のことを専門業者に依頼する人が増えているようだし、聞けば私の両親もなにかしら準備をしているそうだ……

『冠婚葬祭』は本人の意思で「やりません」という選択も可能だと思うが、『葬』の場合は本人以外の人の区切りをつけるための儀式という気もするし、体が残ってしまうから何もしないでというわけにもいかないのだろうし、「葬送の自由をすすめる会」というNPOもあるんだなど、少しずつ情報をためてるなかでみつけたのがお葬式ざっし『葬』。

大きい出版社から葬儀に関する本もいろいろ出ていますが、葬儀社に勤務していた著者の経験も踏まえて、深刻になりがちで話題にしにくい情報をミニコミ誌というかたちで堅苦しくなく発信してくれています。普段の生活にバリアフリーで死を含めてくれる珍しい雑誌だと思います。

ご本人のインタビュー動画も以下のサイトから見れます。

[あっ！とおどろく放送局](http://www.odoroku.tv/vod/000003A5B/index.html)

<http://www.odoroku.tv/vod/000003A5B/index.html>

こちらのページの少し下にある「しゃべくりエーター」枠の 512k で見るをクリックすると CM のあとに番組が始まります (約 45 分)。

## ●上田 昌文

2009 年のおすすめの 3 点は、正確に言うと 3 点ではなく、音楽 (クラシック CD)、映画 (3D アニメ)、書物 (教科書) の 3 領域で、どなたにも強くお勧めしたいものを挙げます。また発行年も 2010 年に少しまたがるものもあります。ご了承下さい。

### 1◆ シフならびにメジャーエワのベートヴェンのピアノソナタ全集

ここ数年をかけて録音されてきたベートーヴェンのピアノソナタ (全 32 曲) の全曲シリーズで、最近 1 年ほどの間に完結したものが 2 つありましたが、その両方がいずれもベートヴェン演奏の新しいスタンダードとなると思われる、最高水準の演奏であることを、私は確信しています。一つは[アンドラーシュ・シフのもの](#) (レーベルは DECCA)、もう一つは、[イリーナ・メジャーエワのもの](#) (若林工房) です。

シフの演奏で驚くべきは、ライブとはとても思えないような、演奏の完成度とこれ以上はないと思え

るような録音の精密さ（極めて細やかなニュアンスを伝える生々しさ）です。ペダルの使用を極力抑えつつ、多くのフレーズにおいてノンレガートで一つ一つの音がくっきりと刻まれるのですが、張り詰める感じのする最弱音から決して濁らない最強音まで、どこをとってもため息の出るような美しさでもって、考え抜かれた“語り”をそれぞれの曲から紡ぎ出しています。たとえば、第29番「ハンマークラヴィーア」の第1楽章を聴いてみてください。他の演奏では厚みのある音の塊と聞こえていたいくつもの部分が、その隅々まで見通せるような透明感が与えられています。聞き手は、そこにより深い“歌”を感じ取ることになり、感動がこみ上げてくるのです。録音について言うと、もしこのCDを高級なオーディオセット（あるいはヘッドフォン）で聴くと、まるで聴衆はあなた一人しかいない広い演奏会場で、目の前でシフが演奏してくれているかのような感じを覚えることでしょう。

メジャーエワは近年、若林工房というレーベルから専属的に多くのCDを出していますが、その中にはショパンの数枚を私は驚きをもって聴き継いできました。ショパン好きなら、例えば最新の2枚の『前奏曲集』と『練習曲集』を聞いて、強いメッセージ性をそこに感じることでしょう。例えば激情的なパッセージを鮮やかな技巧で駆け抜けていくことは、確かに人を圧倒するのですが、その先に何かがあるかどうか——音楽が“快感”以上のものをもたらすとするなら、その先の何かがあればなりません。メジャーエワの演奏の優れているところは、その何かをつかみだそうとする志向が明確であることです。言い換えるなら、どの曲に対しても曲との対話をじっくりと深めて、自分なりの明確なイメージを確立してから録音に臨んでいる、ということです。考え抜いたぎりぎりのもの伝えようとする切迫感がすべてに及んでいるのです。

この2人の演奏を通して聴くなら、ベートーヴェンの巨大な偉業の再創造に、これほどまでに全力を注いで向き合っているピアニストの真摯な姿に、深い感動を覚えないではいられないだろうと思います。

PS 2009年に聴いたオーケストラ曲の録音では、マーラーの交響曲第8番「一千人の交響曲」（マイケル・ティルソン・トーマス指揮サンフランシスコ交響楽団・合唱団ほか）が強く印象に残っています。第8番がこの演奏でやっとすっきりつかめた、という感じです。

## 2◆ディズニー映画『ティンカー・ベル』と『カールじいさんの空飛ぶ家』

2009年に映画館で観た映画は数本にすぎませんが、その中で一番心を奪われたのが、何とディズニーのアニメ映画2本でした（この2本は甲乙をつけ難い）。筋はともに、小さな子どもが観ても分かるくらいに単純ですが、大人でも十分に堪能できるほどに練られています。3Dアニメーションの息をのむような輝かしさと流麗さ——まずもって、もしあなたがここ10年ほどに作られたアニメ作品にまったくうとい人だったりすると、アニメ技術がとんでもない進化をとげていることに度肝を抜かれるに違いありません。次から次へと繰り出される、愛らしいキャラクターたちの心地よいメリハリのある動き。ちょっと不思議で面白い道具やセッティングが満載で、細部の細部まで念入りに作られている遠近感のある背景。米国人の平均的な良識や道德観を反映しつつも、それが嫌みや押しつけにならないで、どこか軽やかで開放的なトーンを醸し出しています。大人も子どもも一緒に楽しめるおとぎ話の最上の映像美とはこうしたものだろうか、と思わないではいられません。

## 3◆『カラー図解 アメリカ版 大学生物学の教科書 第1巻』（講談社ブルーバックス）

理系基礎科目で英語圏の大学で用いられている教科書には優れたものが多い、というのは理系の学問の入門コースに多少なりとも関心のある方なら、よく知られた事実でしょう。この一年で言うと、いずれも翻訳ですが、生物学専門課程向けテキストの定番『細胞の分子生物学』第5版の翻訳（原著タイトルは Molecular Biology of THE CELL）や部分訳になりますが生物学の全範囲をカバーした教養課程向けのテキスト『カラー図解 アメリカ版 大学生物学の教科書』（第1巻 細胞生物学、原著は [Life: The Science of Biology](#)）が出ましたが、その記述の明快さ、そして写真や図解を駆使しての、実験室やフィールドでしか体験できない探求のリアルさになんとか肉薄しようとする点が際立っています。後者では原著は CD-ROM を添えて補足的な資料や手引きを用意するとともに、専用ウェブでも学習を拡張しているように工夫されていますが、この点も、最近の英語圏の教科書では一般化してきていて、例えば、数年前に出た高校生用の物理の教科書『アドバンス物理 AS、2A』（原著は Advancing Physics AS and A2）でもそれが最大限に生かされています。この物理の教科書は日常生活で出くわす諸現象や技術的革新の事例から説き起こして、「物理学がどう生かされているか」を感得させるのを主眼にしていますが、このアプローチは、残念ながら日本の教科書には欠落していると言わざるを得ないでしょう。化学についても、米国化学会が作成した『実感する化学』（原著は Chemistry in Context）『Chemistry 英知を養う化学』（原著は CHEMISTRY A Project of the American Chemical Society）といった同様のアプローチをとった素晴らしい教科書があります。

私は、昨年書いた「地球環境はいま」という連載のエッセイの中の1回で、2009年に出たドイツの環境教育のテキストを取り上げ（『企業診断ニュース』2009年12月号）、その中で次のように書きました。

概して日本の教科書は欧米の教科書に比べてずいぶんとページ数が少ない。コンパクトすぎて通読できない（ストーリー性に欠ける）。また、薄い分、派生的な話題の紹介や解説にも乏しく、興味本位の拾い読みにも適さない。データ集としても活用できない。私は以前に、米国の物理や生物学の高校生向けの教科書を見て、そのボリューム（数百ページに及ぶことがある）とコラムやカラー図解による解説の豊富さにびっくりしたことがある（これは大学の教科書についても同じ）。この経験があるものだから、今でも私は、自分にとって目新しい学問領域を手っ取り早く一渡り眺めるのには、欧米の教科書を通読するのが一番いいと決め込んでいる。

このことは、学校・大学教育の問題にとどまらず、一般市民が自身の科学リテラシーをどう高めるかということにも関係します。日本で“意欲ある市民も使える、学びがいのある入門的教科書”がなかなか出てこない、ということが何を意味するか、真剣に検討するに値する問題だと思えます。

PS 入門的と言うのとはちょっと違いますが、2009年にNHKの番組にもなって話題を呼んだ“ポアンカレ予想”の解決、といった学問的事件の意義を、おぼろげながらも数学の中身とその歴史的展開の実際に即しながら理解できれば、大きな知的愉楽となるはずです。『ポアンカレ予想を解いた数学者』（日経BP社2007）を読み終えて、その興奮のさめやらぬうちに“リーマン予想”を扱った『素数の音楽』（新潮社2005）、“フェルマーの最終定理”を扱った『フェルマーの最終定理』（新潮社2000）を読み返したのは、「数学の素人でも楽しめる数学物語」の様相をつかみたいという気持ちがあったからでしょう



か。年末には[以前ブログで触れて、絶版を惜しんでいた数学書](#)のうちの一つ『[幾何学入門 上、下](#)』（コクセター著、ちくま学芸文庫）が復刊されるのを知り、小躍りしました（ちくま学芸文庫の理数系の古典の復刊のラインナップをみて、その英断に拍手を送る人は少なくないと思います）。ただ、このコクセターの本は物語ではありません。場合によっては読み切るのに何年もかかるだろう、本格的な（数学的スキルを養い大きな展望を与えてくれる）数学書です。数学の学びの本道は、やはり、こうした本格的な書物を、苦しむことを経て得られる喜びを味わいつつ、踏破していくことにあるのでしょう。古典的作品とじっくりつきあいそれを堪能する精神の豊かなありよう――私はこれこそが、教育・学問における“ゆとり”だと思うのですが、いかがでしょうか。■